婦人民主新聞

ごめんください

1978.6.16

著作集〝近代の〈負〉を背負う女〟を出した

八木秋子さん

燃焼し続ける女

東京・池袋から東上線で三つ目の大山駅で下りて五分、都立養育院がある。ここには老衰と死があるだけと人はいう。回想と忘却もある。一室三、四人の雑居生活の中に、八木秋子さんは身をじっと沈めている。

廊下の隅の面会所で会った八木さんは、なんとなく疲れた感じ。

「いまのところ、静養だけ。出版記念会（四月二十九日）やテレビに出たり、人が来たりで、疲れが一べんに出てしまって」

メーデーの記念番組に、旧知のインターナショナルの作詞家佐々木孝丸さんと出演、インターをうたった。

「行きがけに車の中で気もちが悪くなって。――歌い出したら二小節目でどうしても声が出なくなっちゃって。こんどぐらい年齢を感じたことはないんです。

〝近代の〈負〉を負う女〟の出版と、去年の七月から始めた通信〝あるはなく〟に、寄くのはわたし一人で、つい過労になってしまって。六号が出ます。

こういう環境の上に、わたしはもともとスラスラ考えを述べるたちじゃなく、ボチボチ話す方なので、こんどというとんど道もちがうけれども、何とかうまくやっていきたい。わたしたちの頃は、年よりの歴史を知りたいと思ったけれど、いまの若い人は、アッサリしている、刺げきが多すぎるのでしょうか。

六〇年安保のとき、櫻美智子さんが亡くなった翌日、婦人民主クラブの隊列に加わって、日比谷音楽堂からデモに出発したときの興奮――ああいう感激は、あれからはもうなかった」

大正から明治のはじめにかけて神近市子のやめたあとの東京日々新聞で活躍、社会運動に参加。アナキズムに接近。長谷川時雨が主宰する〝女人芸術〟の編集に参加。毎号小説、評論を執筆。二九年、七月同誌上に藤森成吉に公開状を発表、それから論争が発展し、十二月号まで、高群逸枝などが加わって

は、年齢を考えました。通信を出すのに、若い人が集まって手伝ってくれています。みんなわたしから見れば孫くらいだけれど、どういうわけか気もちがあって。年なんかそっちのけで、よく訪ねてくれます。学生も、労働者、サラリーマン、女の人も」

一八九五年、長野県木曽福島の生まれ、松本市立女子職業学校を出て、結婚、一児をおいて家を出た。

「娘時代、らいてうの〝原始女性は太陽であった〟の感激はいまも生きいきしています。子に別れて家を出たことが、私の第一の出発でした。話し出したら長くなってしまう。

若い人たちと、年齢、時代、アナ・ボル論争が展開された。

八木さんは長野県下の農村青年のコンミューン運動に関係、逮捕され、実刑二年六カ月。三八年、四十三歳渡満。満鉄につとめ四五年敗戦帰国。戦災者、引き揚げ者、孤児の収容施設のいまも生きいきしています。子職員となる。

この間においてきた一子にめぐり会いその臨終をみとる。

〝あるはなく〟2号「わが子との再会」に、息子のことばがあるく、ほんの時間的余裕もあろうし、わずかな能力の残滓も生活のなかに身をおいて老衰と退歩に抵抗を継続するその闘いの中に、現在の私の生命が光りを得て燃えることもあり得るにちがいない」

（〝あるはなく〟第3号）から

（帆）

〝近代の〈負〉を背負う女〟

JCA出版 一三〇〇円

養育院明々寮で

「あなたがどうして家を出て行ったか、帰らないところに行ったかは、ぼく、おやじの人間を知ることで、だんだん判ってきたけれども、もう一つのこと、あなたがなぜぼくをつれて出なかったか。そのことをいちばん訊きたかった」

この問いについて母は答えないうちに、息子は急死した。

底辺の生活をつづけ、十年くらい前から清瀬市のアパートに一人住み、執筆と生活保護で暮らしていた。アナキストの評論家秋山清さんは「八木秋子さんは自分の足跡を消しながら生きている」と書いている。

「八十三歳というじぶんの年齢もわきまえ、前途には老衰と死があるだけだと思う。その覚悟を肚に据えてまだすべての終焉までにはい

共同通信 中国新聞 78.6.21 (第三種郵便物認可)

波乱に満ちた自立への闘い

個人通信「あるはなく」発行 八木秋子さん

家を捨て 子とも別れ

良心に生きる老女の叫び

八十三歳になる一人の女性が、今、老人ホームの雑居生活の中から〝老衰と退歩に抵抗〟し、個人通信「あるはなく」を出している。その長い、自立への闘いから生まれた彼女の言葉は、友人、読者の間に大きな反響をよんでいる。

「女人芸術」で活躍

八木秋子。かつて林芙美子、吉屋信子らとともに「女人芸術」で活躍、さらに、絶対自由を求めるアナキズムの雑誌「婦人戦線」を高群逸枝、住井すゑらと発行し、昭和のアナキズム運動に足跡をとどめた女性。

この四十年間は、母子寮の寮母をしたり、地域活動に加わったり、ほとんど無名のまま、ひっそりと日本の底辺の生活を見つめて来た。詩人・秋山清氏によれば、〝自己の足跡を消しつつ生きる姿〟なのだった。

しかし、最近、昭和初期の「女人芸術」「婦人戦線」「黒色戦線」などに掲載された小説、評論、紀行文などをまとめた著作集「近代の人負〉を背負う女」（JCA出版）が出版された。相京範昭さんという若い友人の励ましと努力によるものだった。個人通信も本も相京さんの八木さんに対する深い共感から生まれたといえる。

老人ホームで生活

梅雨入り前の、さわやかな風が吹きぬける、ある日。八木さんの東京都立養育院の、希望していない〝前途に安全はあっても道のない老人の国〟に彼女を訪ねた。

軽費老人ホームは待機者が多く、また保証人の問題もあって、生活保護法の適用を受ける雑居寮の方に住まう。一年半前に入居。

「入居後、一カ月ぐらいたって、耐えられなくて抜け出したんです。四日ほどさまよいました。相京さんの所にも立ち寄って、その時ゴッホの画集やシベリアの画集を夜を徹して見つめていたというのです。けれどここを飛び出したらどこにも住みかはない、ここが最後の所なのだと帰りついた時は、自分にも大きなショックでね、いろいろ考えました」

貧しい独り暮らしながら、手を伸ばせば書物があり、ノートがあった自由な生活から、わずかな私物を持って四人部屋へ。それは一層深い孤独だっただろう。

すべてさらけ出す

その後、個人通信に、これまで波乱の生を歩み、また今、養老施設に身を沈めて生きつつある自分を書いてみよう、と決心する。きっかけは、相京さんの言葉だったという。

〝あなたは愛のない結婚から離脱した時、幼いわが子とも別れてきた。その後の思考や行動の原点にあるのはその体験ではないか。それをさらけ出して自由になることから！〟と。

こうして、現在五号まで出ている通信は、長野の木曽福島に生まれた八木さんが、幼年からキリスト教の影響を受け、結婚し子供を持ったが、小川未明、有島武郎らを知ったことから家を出た体験を語って、始まる。

「どんな文章になるか、表現になるか、見当つかぬまま、とにかく書きたい衝動が強いのです。でもいつもそうだったのです。先人の書いたものより私のは軽い。高群逸枝さんの仕事をみると大変な文献を読み通しての積み重ねですね。私はパッと思いついてすぐ行動に移して没頭するような情感派だから書くものも飛躍が多いですよ」

亡き父と幻の対話

八木さんの自己診断はさておき、〝生きるかぎり闘う良心から身もこころも離さない、しかも自由人でありたい〟と、ひたむきに生きてきた彼女の肉体をくぐって生まれた言葉には、真の思想といえるものがある。知識の再構成ではない、人間そのものをあらわにする言葉がある。

神近市子がやめたあと東京日日新聞社で活躍、その後昭和のアナキズム運動に身をていして逮捕されるなど、変転きわまりない八十余年が、これから少しずつ記されるだろう。四号で「独房」と題して、八木さんは刑務所にあって、亡き父と幻の対話をする文章を載せている。〝最も心にかけてくれた人〟との対話の中に、家を捨て、自立を求めた八木さんの声が、父への哀唱となって響いてくるのだった。

（JCA出版は東京都千代田区神田神保町一ノ四、明治新ビル）

東京・板橋区の都立養育院の八木秋子さん

新日本新聞　第3種郵便物認可　1978.6.25

アナキスト・八木秋子のこと

――著作集Ⅰを中心に

堀場　清子

昭和初期に、農村コムミュンの理想をかかげて活動したアナキスト・八木秋子は、今日、ほとんど忘れられた存在となっている。最近出た彼女の著作集Ⅰ『近代の〈負〉を背負う女』（JOA出版・一、三〇〇円）が、一部の人々の熱い関心と、大方の無関心のはざまに置かれているのも、無理からぬことといえようか。

発言に新鮮さ

戦前、治安維持法によって二年六カ月の刑をうけた彼女は、敗戦の「測外」から引き揚げた時、はたはたして戦後社会に復帰する道をとらなかった。母子寮の舎母や地域活動の中へ自分を埋めた彼は、ソ連の乱暴にあって自殺したマルキストの友・永鳥暢子の遺骨がかくれている。そしていま、東京都立養育院の雑居の部屋に、八十三歳の日々を過ごす。その彼女の、戦前からの作品をひろい集め、著作集をまとめあげたのは、彼女の若き友・相京（あいきょう）範昭氏である。同氏は、八木秋子の未発表原稿を主とした通信『あるはなし』をも発行している。

高群逸枝の資料を求めて、『女人芸術』や『婦人戦線』をよみはじめた数年前、私は八木秋子の名さえ知らなかった。だが逸枝の活動を手繰れば、論客・秋子の堂々たる風姿が、いやでも目についた。とりわけ座談会での彼女の発言には、きらめくような新鮮さがあって、八木秋子へと導引されゆく自分を、私はたえず意識するようになった。秋山清氏の二冊の足跡を消しつつ生きる昭和のアナキスト・八木秋子」（『婦人公論』一九七二年五月）を、そのころ、彼女への傾倒を決定的にした。

実践へ投じる

その最初の作品で秋子はいう。「屠殺のすべてより反逆者と屠られつつもなお人類としての正しき感覚に生きんがために、赤裸裸なる一人の自己を地上に立たしめて、大自に戦を見し得る勇気ある人が幾人あるであろうか」・本書を通読して打たれるのは、彼女が、まさにその言葉どおりに生きたという事実である。また『婦人戦線』の編集者高群逸枝と共に、この論争の一翼を担った記念碑的論文「資本主義経済と労働婦人」（『黒色戦線』一九二九年十二月）、「ウクライナ・コムミュン――ネスト・マフノの無政府主義運動――」（『婦人戦線』一九三〇年三月、四月）は、アナキスト・文芸の代表作とされている。

八木秋子さん（今年3月写す）
＝八木秋子著作集Ⅰ『近代の〈負〉を背負う女』から

鮮烈な魂の軌跡

農村コムミュン夢みて

実践論を展望した」は、高群逸枝らと共に、この論争の一翼を担った記念碑的論文である。また「一九二二年の婦人労働祭」（『黒色戦線』一九二九年十二月）、「ウクライナ・コムミュン――ネスト・マフノの無政府主義運動――」（『婦人戦線』一九三〇年三月、四月）は、アナキスト・文芸の代表作とされている。

本書は、彼女の既発表作品のほとんどすべて、三十八編を収める。一九二二年二月の『獅吼』人」にのった「婦人の解放」から、一九二六年九月の「マルキスト永鳥暢子との思い出」（『高群逸枝』）まで。その大部分が一九二八―三〇年の二年たらずの期間に、『女人芸術』と『婦人戦線』に寄かれている。「公開状――藤森成吉氏へ」、「暮り日の独白」は、『女人芸術』での有名なアナ・ボル論争の発火点となったものだし、つづく「簡単な質問（藤森成吉氏へ）」「凡人の抗議」「隅田氏の論を駁す」は、高群逸枝らと共に、この論争の一翼を担った記念碑的論文である。また「一九二二年の婦人労働祭」（『黒色戦線』一九二九年十二月）、「ウクライナ・コムミュン――ネスト・マフノの無政府主義運動――」（『婦人戦線』一九三〇年三月、四月）は、アナキスト・文芸の代表作とされている。

どう継承する

戦前の女性論に鋒鋩をつらねた高群逸枝と八木秋子。一人は三十年間の女性史研究に自己を閉じ、古きものの探求によって未来を啓示した。一人は実践の場へと自己を駆り、過去いっさいを基底に振り捨てつつ生きぬいた。逸枝の業績は偉大だが、秋子が身をもって描いた鮮烈な軌跡もまた、心を撃（ウ）きつけてやまない。本書の刊行を第一歩として、その軌跡をあきらめることなく文学に定着するためには、より多くの人々の助力が必要とされよう。「長い過去の道程を、問いを、失敗の敗北だのとは思わない」と、あとがきに彼女はいう。だが彼女のめざしたものはみな、いまだ現実をみない。それが表題にいう「近代の〈負〉」とすれば、その「人類としての正しき意志」は、継承によってのみ、私達の社会に「正」として甦（よみがえ）えりうるのだから。

（詩人）

JOA出版＝東京都千代田区神田神保町一ノ四一目東ビル。『あるはなし』申し込み先＝東京都小平市花小金井南三ノ九二九、相京範昭。各号一五〇円、六号まで既刊。

1978.6.24

【第三種郵便物認可】　図書

八木秋子著

近代の〈負〉を背負う女

〈八木秋子著作集Ⅰ〉

近代日本における女性アナーキスト五人をあげるとなれば、明治に管野すがが優るとも劣らない、と私は見ている。

思うに、管野、伊藤、金子の知名度は、多分にその非業の最期からくる興味に支えられているふしがあり、それ故にさまざまに語られ、書かれはしたが、アナーキストを自認した彼女たちの思想と活動の跡を仔細に点検したものはほとんど見当らない。高群逸枝は後半生を賭けた女性史著述の違業ばかりがクローズアップされて、これまたアナーキストとしての活動にメスを入れたものが少ない。

つまり、日本の女性アナーキストの思想と活動は、今以て大方が闇に埋もれたまま、婦人解放運動史やアナーキズム運動史から看過されている。このいささか片手落な現状に、今まで毀誉褒貶の外にいた八木秋子の著作集『近代の人負〉を背負う女』の刊行は、異議申し立てをしているかにみえる。

年譜によると、八木秋子は松本の女子職業学校を出て、二十二歳で結婚したが、愛のない結婚を破壊して家出、女中、小学校教師、新聞記者となって自身の生活を確立する一方、社会運動に接近し、やがてアナキズムの立場を明確にしていった。三十三歳のとき、『女人芸術』の同人として編集にも参画し、ほとんど毎号評論や創作を発表した。引き続き、アナーキスト系の女性の集った『婦人戦線』にも参加し有力な同人となった。

著作集にはこの時期『女人芸術』誌上に発表したものが主に採録されているが、興味深いのは、八木秋子は、戦旗派の旗手・藤森成吉への公開状である。この中で八木は、作家の「誠実」と「イズムの政治目的のために書かれる作品」に対するボル派の反駁、更にアナ派による反駁と続いたこの論争は、女性の雑誌における女性のアナ・ボル論争として少なからぬ意味を持つものである。

当時のアナーキストの最大の文芸誌『黒色戦線』に発表した「一九二二年の婦人労働祭」も読みごたえのある小説だ。革命ロシアの反革命運動に取材して単なるレポートに終らず、小説としてまとまっている。ほかに短い文芸評論や旅行記も収録されており、いずれにも非凡な洞察力と表現力がうかがえる。このまま文芸家として

女性のアナ・ボル論争

『女人芸術』誌上で藤森成吉に公開状

江刺昭子

それが発端となって一〇数回に及ぶアナ・ボル論争になった藤森成吉への公開状である。この中で八木秋子は、「どの矛盾をついてせめよ」と。その道を歩めば、異彩を放つ存在になったろうと思われる。

が、秋子はこの後、かねてからの主張である自由連合社会実現のための実践運動に参与した。もとより報われることを期待できない運動であり、泥にまみれ、傷つくのも覚悟だったろう。その時期の秋子の発言がどんなものであったか、続刊が待ち遠しい。（聖心女性史研究家）

週刊ポスト　1972年10.20

ポスト・ブックレビュー

一女性アナキストの魅力ある歩み

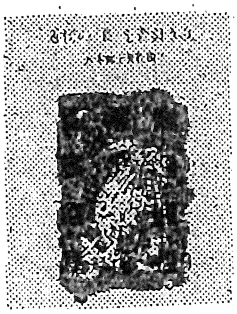
八木秋子

近代の〈負〉を背負う女

八木秋子著作集 I

JCA出版・刊（一三〇〇円）

八木秋子　1895年生まれ。東京日日新聞記者を経て『女人芸術』などの編集に参加した。



この本の著者八木秋子は、きわめて興味深い生き方をしてきた女性である。戦前は大新聞の記者を勤めた後、昭和のはじめには長谷川時雨、林芙美子など当時の代表的な女性作家、芸術家の主催する文芸雑誌『女人芸術』の編集に参加した。この頃から著者は、思想的にアナキズムに近づき、当時マルクス主義者が絶対視していたスターリン時代のソ連社会主義をはげしく批判した。『女人芸術』誌上に載せた藤森成吉にたいする著者の公開質問状が契機となって、高群逸枝なども加わった有名な「アナ・ボル論争」が起こっている。

昭和五年著者は、平塚らいてう、高群逸枝、住井すえたちと、アナキスト系の月刊雑誌『婦人戦線』を創刊する。同じ頃、米国で起こった、無実の罪で共産主義者でイタリア系移民の労働者を死刑にした「サッコ・バンゼッティ事件」をテーマにした劇「ポストン」で主役の老女の役を演じたりしている。

左翼にたいする弾圧がはげしくなった昭和一一年治安維持法で逮捕され、二年六か月の刑を受けた。釈放後は当時の多くの転向者がそうであったように、著者も満州に渡った。

敗戦後、かつての仲間が戦後民主主義の潮流に乗って、はなやかな婦人運動の指導者となって行ったのに、著者は工場の寮母や施設の職員といった底辺の人びとの中での生活を選んだ。今日八三歳の高齢でありながら、個人通信『あるはなく』を書きつづけている。恐らく著者がこの本の中にも収録されている小説「柿をもってきた父」、「チャルメラの記録」などに登場する底辺の人びとへの愛と連帯を、戦後の繁栄の犠牲となっている人びとに変らず寄せているからであろう。革命後のソ連を題材にした小説「一九二一年の婦人労働祭」でも、プロレタリア独裁に反対し、自由を求めたクロンシュタットの反乱に連帯した労働者の群像に光を当てている。

そのほか、この本書には、昭和の初期に著者が『女人芸術』、『婦人戦線』に発表した小説、評論が収録されている。その中には林芙美子と二人で『女人芸術』のために九州を講演旅行したときの旅先きからの二人の手紙、あるいは「資本主義経済と労働婦人」のように紡績業における女工哀史の背景を分析した論文もふくまれている。

最後の部分に、最近著者がかつての仲間であった吉屋信子、高群逸枝などについて憶出という形で書いた文章がいくつか収められている。この中で、著者と同様転向者として渡満し、戦敗後ソ連軍に犯されて自殺した永島暢子の憶出は心を打つ。

本書は、表題にあるようにアナキストとして戦前、戦後を生きた八木秋子の著作集第一巻である。この魅力のある女性の生き方を知るには、続巻とそして通信『あるはなく』を読まねばならない。社会の底辺に生きる人びとを書き、人間の自由と解放を求めてやまない一人の女性の一生をそこに見いだすだろう。

（北沢洋子＝国際問題評論家）